

独島の真実_1

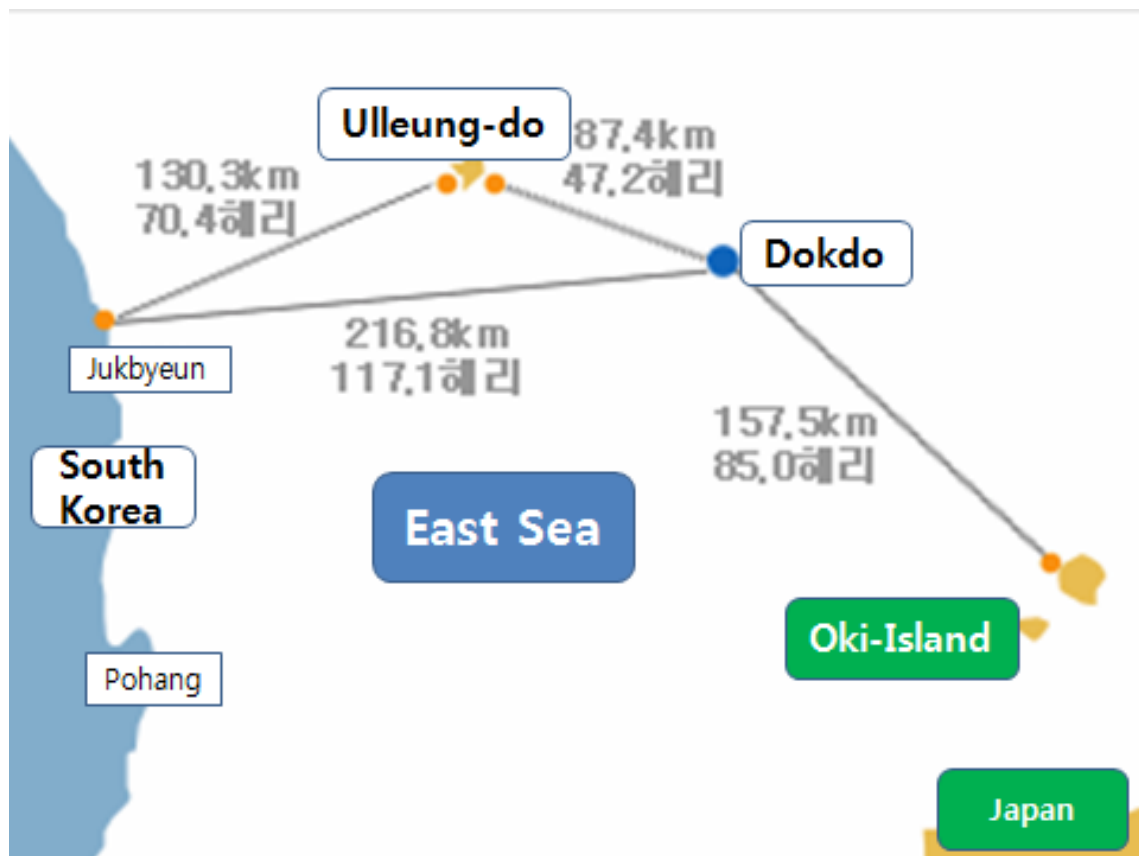
- 于山国と于山島 -

世宗大学独島総合研究所 編

1. 独島の位置

独島がどこにあるのか、本土からの距離、鬱陵島からの距離、そして独島に最も近い日本の島である隠岐からの距離について調べてみる。

独島は鬱陵島から東南の方向、87.4kmの距離にあって、天気が晴れた時、鬱陵島から肉眼で見ることができる。一方、独島は日本の隠岐から157.5km、北西方向にあるが、隠岐からは肉眼では見ることができない。



2. 独島に関する最初の記録

- ・ それでは、韓国の記録の中で、最初に独島に関して記録した文書は何だろうか。
- ・ 『三国史記』(1145)の中に鬱陵島に関する記録がある。西暦512年の記録に「于山国」が記録されている。
- ・ 新羅のハスラ郡主異斯夫が、于山国を新羅の領域にする話がそれである。

1) 『三国史記』の中の于山国

〈要約〉

- ・ 512年、時は新羅の智證王の治世だった。智證王は東海の島々に対する支配欲を強く持っていた。それで彼は、ハスラ郡主(ハスラ郡:現在の江陵)異斯夫に東海の于山国を征服して、新羅の領土とすることを命じた。
- ・ 異斯夫は、于山国の人々が性格が荒く、簡単に降伏しないことを知っていたため、ある計略を考えた。
- ・ それは木で獅子をたくさん作り、于山国の人々を威嚇する計略であった。
- ・ 木造の獅子をたくさん載せ、異斯夫の水軍は鬱陵島に向かった。そして鬱陵島の海岸に到着すると、獅子をすべて海岸に置き、彼は叫んだ。
- ・ 「降伏せよ! さもないとこの猛獣を放って、お前たちを踏み殺させるぞ!」
- ・ 木造の獅子たちを本当の猛獣と思った于山国の人々は、異斯夫軍の前に皆、降伏した。
- ・ こうして于山国は新羅の地になり、韓国領土となったのである。

2) 『三国史記』の原文を見てみよう

- ・ ここでは『三国史記』の原文を確認する必要がある。その作業はとても重要である。
- ・ 異斯夫の于山国征服に関しては、『三国史記』巻4、新羅本紀4(智證麻立干13年6月条)に漢文で書かれた原文を現代語訳すると次のようになる。

・ 13年(西暦512年夏6月)、于山国が帰属してきて、毎年地の産物を供物として献上した。于山国は溟州(=江原道)の真東の海上にある島で、鬱陵島という。その島は四方が100里で、島民たちは地勢が険しいことを信じて服属しなかった。伊淪異斯夫がハスラ州の郡主となった。

・彼は、于山国の人々は愚かで性格がとても荒く、武力だけでは降伏させるのは難しいが、計略で臨めば服属させることができると言った。

・それで多くの木造の獅子を作り、軍船に分けて載せた。その国の海岸に到着するや、だまして言った。「お前たちがもし服属しなければ、この猛獣を放って踏み殺させるぞ。」その国の人たちは、恐れてすぐに降伏した。

『三国史記』 卷4、新羅本紀4(智證麻立干13年6月条)

十三年夏六月于山國歸服歲以土宜為貢于
山國在溟州正東海島或名鬱陵島地方一百
里恃險不服伊飡異斯夫為何瑟羅州軍主謂
于山人愚悍難以威來可以討服乃多造木偶
師子分載戰船抵其國海岸誑告曰汝若不服
則放此猛獸踏殺之國人恐懼則降

『三国史記』 卷4、新羅本紀4の正文

左の漢文は、『三国史記』の于山国征服記録の原文。漢文の原文を確認することが重要である。

3. 日本側の批判：于山国には、独島が含まれていなかった。

*ところが日本側は、『三国史記』512年の記録には鬱陵島が記載されているだけで、独島に関する記録はないと反論する。また日本側は、当時の于山国とは鬱陵島を指す言葉だったと主張している。

* しかし、于山国は国家としての範囲を持つ国だった。特に晴天なら、鬱陵島から独島が肉眼で見える。そのため鬱陵島の住民は、独島を見ながら独島までを自国の領土と考えたはずである。そのため、韓国の多くの古地図には、鬱陵島の隣に于山島(=独島)が描かれている。



19世紀半ばに製作された『海東輿地図』の鬱陵島、独島の部分。独島が「于山島」と表示されていて、独島の峰までよく描写されている。

・そして、『世宗実録地理志』(1454)には、「于山と武陵(=鬱陵)の二島は、(中略)互いに遠くなく、天氣が晴れるなら、眺めることができる。新羅時代には于山国と称した」と書かれている。すなわち、于山島(=独島)と鬱陵島の二島を、新羅時代に「于山国」と呼んだという意味である。

・時代が下り、公式文書である『東国文献備考』(1770)、『萬機要覧』(1808)、『増補文献備考』(1908)などには「于山と鬱陵、ともに于山国の地、于山は倭のいう松島(=独島)である」と明示されている。

・これらの文献には、于山島が于山国の領土、つまり朝鮮の地であり、于山島とは独島であるという事実が、正確に記載されたのである。つまり、于山国は鬱陵島と于山島とで構成され、于山国はまさに独島であった。

(注) 日本は19世紀まで、独島を松島と呼んだ。

・ 結論として、于山国は鬱陵島と独島で構成された国であり、512年から二島は正式に韓国領土となったのである。

・ 日本の主張は『三国史記』だけを強調して、他の文献を無視するところから始まった歪曲に過ぎない。

4. 高麗に朝貢に来た鬱陵島の人々

* 新羅の領域となった于山国は、それ以降新羅の統治下で平和な日々を送った。ところが、統一新羅時代が終わり、後三国時代となった930年、鬱陵島の人々が高麗の太祖王建を謁見し、朝貢した記録がある。

* 930年頃には韓半島の新しい主人が高麗になるだろうと考えた鬱陵島の人々は、高麗の王建を自分たちの新しい王として仕えることを決めたのだった。その後の935年、新羅が高麗に進んで降伏し、936年、高麗は後百済を倒して後三国を統一した。

* このような事実に関する原文は以下の通りである。

ウルン島 (=鬱陵島) からペッキルとトドウルを送ってきて地の産物を捧げたので、ペッキルを正位に、トドウルを正朝に任命した。

『高麗史』 卷1、太祖13年 (930年) 8月條

上の原文を見ると、王建が鬱陵島の人々に正位と正朝という官職を下した事実を知ることができる。鬱陵島と独島はこうして新羅を滅ぼした高麗の領土となった。